

つながり うまれたものがたり
二条通りで「ムートーク」

徳島県小松島市

希望は捨てない

併せ持つもの ~ 新たなもの

懐かしい香り
懐かしい顔
懐かしい風景



ある土地に居て、その土地とともに生きる人たちが、たくさん居た。
そして、人と人は共に寄り添って来た。
世代を超え、長い年月をかけて継承されてきたもの。

そんな、懐かしい記憶が染みついている街を、
私たちはすっかり忘れてしまっていないだろうか。

その懐かしい記憶すべてに、生きた人たちの思いが詰まっていることを...



東西からの道へ — 西側から東側へ —

まさに、ひと・もの・文化のつながりであった。
その中心として、二条通り商店街は存在した。

しかし自動車普及による軌道の廃止や、1999年の新石井駅大塚の閉鎖が決定
となり、小松島港と徳島間の旅客列車は完全に廃止された。

そして現在、二条通り商店街は人通りが減り、空き家が増え、記憶の染みつい
た街へと変貌していった。残念ながら、小松島の空気は失われていく一方だ。



私たちは、今は壊れてしまっているその土地とともに生き続けてきた人たちの
記憶を引き出し、空気ある街にしようと考えた。
小松島市にはたくさんの宝がある。

そのひとつが海産物だ。

小松島産には漁村があり、紀伊水道で育った澄きの良い鮮魚が水揚げされ
る。その中でも、国内有数の産地を誇る、「鱧」や「しらす」がある。特
に、この鱧は京浜沖に運送される。京料理の代名詞、鱧料理として生まれ変わる。
その土地の宝であるはずの「鱧」。

その「鱧」を『小松島ブランド』として育てたい。
地域の活力の源として。

小松島を愛してやまない人たちがいた。
しかし、街は寂しくなり、人口減少も止まりがきかない。
『小松島を元気にしたい。』

そして、小松島の海産物に注目した。
鱧を小松島産ブランドとして、最高のものに育て上げるぞ！



併せ持つもの
二条通りが
結びつける

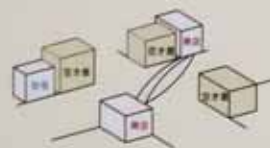
そして、新たなものを産み出す。
希望と理想を繰り返して、重ねていく。

同じ思いを胸に、



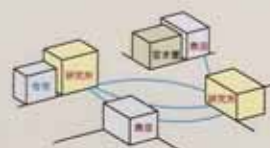
また、「海産物ブランド」を育てよう。

Scene-1 (現在)



現在の二条通りには空き家が増え
た。
人通りが少なく、活気もない。と
ても寂しい通りである。
人は買い物や食事を楽しむため
、ある商店を目指す。そして帰って
いく。
商店から商店への動きもごく稀で
あろう。
人が歩き、行き交い、集まる場
はない。

Scene-2



そこで、二条通りの空き家に水産研
究所を構成する研究室を設置する。
研究員が各研究室を往來するだけ
でなく、ランチを楽しむため商店
（新
規）に訪れる。この動線は、人が交
わる機会を生む。
地域の宝である
「水産一魚一鱧」
に関わる言葉が交わされ、地域の人
々は同じベクトルを持つこととなる。

Scene-3

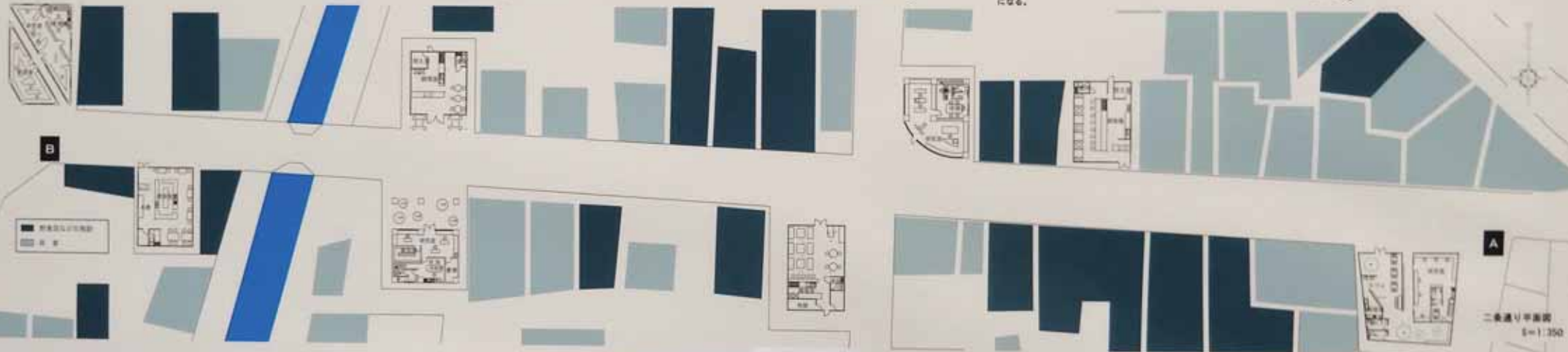


「水産一魚一鱧」 ← 同じベクトル
これはそこに住む人々が、私たちの記憶をたどり、
大切なものを共有する。
研究された鱧が店頭に並び、売られる。
「あれは、とても喜んでくれたわ。」
「あれは、売れたな。」
「あれは、もうちょっと値をあげよう。」
空き家が、カフェに、特産のフィッシュカフェと竹
の器を体験する場。
商店主と研究員、まさに地域の交流の場をつくりだ
す。小松島（二条通り）ならではの持続可能な商店街
になる。

Scene-4

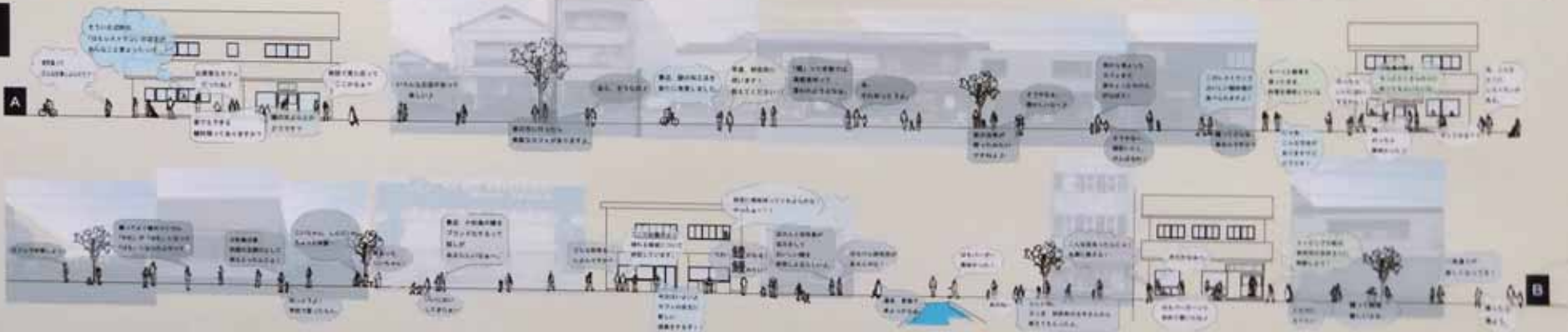


実際に小さな店舗の立ち上げ
がもたらさない。
しかし、必ず、水産物ブランド
のイメージが伝わり、街に
活気を取り戻す。
地域の宝を、地域で守り育て
ていく。
そして、人が集まり活気ある
商店街が生まれ、街が活きる。



二条通り
ある一日の風景

ここ二条通りでは、様々な人たちが行
き交う。
活気ある街の、活気ある一日。
商店主、研究員、買い物客、観光客。
いったいどんな会話が交わされている
のだろうか。
つながり、ともに暮らす。
そんな一日を体験してみた。



二条通り南立面
1:200